The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	悲劇の歴史性 : 歴史の三形態と『悲劇の誕生』
Author(s)	茶園, 陽一
Citation	メタフュシカ. 2004, 35(2), p. 129-136
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7023
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

悲劇の歴史性
― 歴史の三形態と『悲劇の誕生』―

茶園　陽一

一八八八年に執筆された自伝的著作『この人を見よ』(*Ecce homo*)において、ニーチェは、『悲劇の誕生』(*Die Geburt der Tragödie*)がヴァーグナーを信奉する者のために利用され、そのために、この本の根底に隠されている、より価値の高いものが理解されないままになってしまったことを述べている(Vgl.EH,S.309.)[1]。ニーチェ自身が『悲劇の誕生』を執筆した当時、「リヒャルト・ヴァーグナーに捧げる序言」を付し、ヴァーグナーの音楽のうちに古代ギリシアの悲劇の精神の復活を見出していたこともその理由として挙げられるであろうが、同書のタイトルは何度も「音楽の精神からの悲劇の再生」と間違われていたという。

ニーチェによれば、むしろ『悲劇の誕生』は、「ギリシア精神とペシミズム」(Griechenthum und Pessimismus)と題されるべきものだった。つまり『悲劇の誕生』は、「汝にとって最良のものは、全く到達不能である。すなわち生まれて来なかったことであり、存在しないこと、無であることだ。しかし汝にとって二番目に良いものは――すぐに死ぬことだ」(GT,S.35.)という厭世的な伝承を残した古代ギリシア人たちが、何をもってペシミズムを克服したのかを最初に教えた著作であった(Vgl.EH,S.309.)。ニーチェはこの点にこそ、『悲劇の誕生』という書物が画期的な著作であった根拠があると評価している。

『悲劇の誕生』に対するニーチェの「自己批判」は、さらに続けられる。彼は同書が、へー

---

[1] ニーチェの著作からの引用は、下記の全集に拠った。なお、引用したドイツ語は、下記の全集の古い書体のまま記した。
Nietzsche,Friedrich:*Sämtliche Werke,*Kritische Studienausgabe in 15 Einzelbänden（以下 KSA と略記する),hrsg.v.G.Colli und M. Montinari,Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter,Berlin/New York,1988.
本文中の引用箇所には、著書名の略記・頁数を記す。邦訳として理想社版および白水社版のニーチェ全集を参照した。引用部分は筆者が原文から直接行った。また、上記の全集において隔字体で表記されている箇所については、本論文において日本語で引用する際、下線を引いて表記する。
GT:*Die Geburt der Tragödie,*KSA.1.（『悲劇の誕生』）
UBHL:*Unzeitgemässe Betrachtungen　II*（Vom Nutzen und Nachtheil der Historie für das Leben),KSA.1.（『反時代的考察』第二編「生に対する歴史の利と害について」）
MA Ⅱ:*Menschliches,Allzumenschliches　II*,KSA.2.（『人間的、あまりに人間的』第二巻)
EH:*Ecce homo,*KSA.6.（『この人を見よ』）

ゲル的な思考形式に従って執筆されていると述べる(Vgl.EH,S.310.)。すなわち、一つの理念、すなわち「ディオニュソス的-アポロ的対立」という理念が、形而上学的なもののうちへと翻訳されており[2]、また、歴史そのもの(die Geschichte selbst)がこうした理念の展開として捉えられていて、悲劇のうちに「ディオニュソス的-アポロ的対立」が統一へと止揚(aufheben)されてしまっていると評される。

ニーチェは『この人を見よ』執筆の二年前にあたる一八八六年に、それまで刊行されていた著作に新しく序文を付した。ニーチェの自著に対する「自己批判」は、この一連の序文群においても看取することが出来る。『人間的、あまりに人間的』(*Menschliches, Allzumenschliches*)第二巻の序文において、ニーチェは以下のように述べている。「私の全ての著作は、無論唯一の本質的な例外を除いて、遡って日付を記入するべきである。それらは常に＜私の背後＞(Hinter-mir)について語っている。『反時代的考察』(*Unzeitgemäße Betrachtungen*)の最初の三編のように、二三のものは、それより先に出版された本の成立時期や体験時期のさらに背後に遡ってさえいる」(MA Ⅱ,S.369)。「それより先に出版された本」とは、無論のこと『悲劇の誕生』を指す(ebd.)。

したがって、ニーチェの処女作である『悲劇の誕生』は、『反時代的考察』において展開されるニーチェの思想的圏域のうちに含まれるのみではない。むしろ、『反時代的考察』の叙述の内容から、あらためて『悲劇の誕生』を解釈する必要があるだろう。

上述したように、『悲劇の誕生』は後年のニーチェによって批判がなされてはいるが、とはいえそれは、「ディオニュソス的なもの」(das Dionysische)「アポロ的なもの」(das Apollinische)の対立を軸にした、ギリシア悲劇をめぐる歴史的展開の記述という側面を有する。本稿では、『反時代的考察』において叙述されるニーチェの歴史観から鑑みて、『悲劇の誕生』におけるギリシア悲劇の歴史的記述はどのような地位を占めているのかを明らかにしたい。

一　悲劇の歴史的展開

まず、『悲劇の誕生』において記述される、ギリシア悲劇の歴史的展開を概観してみたい。ニーチェは同書において、ディオニュソス的芸術およびアポロ的芸術がいかにして悲劇芸術として結びつくか、そうして誕生した悲劇がいかなる運命を辿ったかを叙述する。悲劇の歴史的展開は、三つの段階に区別することが出来る。すなわち「悲劇の誕生」、「悲劇の死」(der Tod der Tragödie)、「悲劇の再生」(die Wiedergeburt der Tragödie)の三段階である。

（一）　「悲劇の誕生」

ニーチェは、「芸術の進展はアポロ的なものとディオニュソス的なものとの二元性(Duplicität)に結びつけられること」(GT,S.25.)を示す。悲劇の歴史的展開の第一段階は、「悲劇の誕生」の段階である。それは、造形芸術を象徴する「アポロ的なもの」と、音楽を象徴する「ディオニュソス的なもの」という相対する二つの芸術衝動(Kunsttrieb)の宥和(Versöhnung)によって発生す

[2] 『悲劇の誕生』においては、我々の生存(das Dasein)と世界は、美的現象としてのみ義認(rechtfertigen)されると述べられている(Vgl.GT,S.47.)。

る。また、「アポロ的なもの」は夢、「ディオニュソス的なもの」は陶酔という人間の生理学的現象(physiologische Erscheinung)に対応したものとみなされる(Vgl.GT,S.26.)。

「アポロ的なもの」に対応する夢は、目覚めている時と比較すれば仮象(Schein)に属する。夢においては、そこに登場する様々なものは、仮象としての形姿をとって現れる。「アポロ的なもの」は「個体化の原理」(principium individuationis)(GT,S.28.)を本質的特徴としてもち、形象化の働きをなすために造形芸術一般を成立せしめるものとして規定される[3]。

他方、「ディオニュソス的なもの」に対応する陶酔は、「個体化の原理」を破壊する作用を持つ。陶酔状態にあっては、個々人の間の隔たりや、人間と自然との間の隔たりが解消され、主観的なものは完全な自己忘却(Selbstvergessenheit)へと消滅する(Vgl.GT,S.29.)。

こうした「アポロ的なもの」と「ディオニュソス的なもの」という芸術衝動が結びつくことによって、悲劇という芸術形態が誕生した。ただし、ニーチェにとってギリシア悲劇の根源(Ursprung)は、あくまでも「ディオニュソス的なもの」にあり、その起源は「コーラス」(Chore)である。ディオニュソスを讃える「ディオニュソス的ディテュランボス(酒神賛歌)」に端を発する「コーラス」すなわち合唱隊は、ギリシア悲劇においては、ドラマの筋に関係する詩を詠い、同時にドラマのうちで特定の役割を与えられ、ドラマに参加しつつ、それを眺めるという重要な働きをなす。

「コーラス」の音楽的効果による陶酔において、悲劇の観客は各々の現実的生活の拘束や節度を破壊され、恍惚状態に陥る。この状態では、観客は過去の個人的体験を忘却し、悲劇のうちへと忘我の境地で没入してゆく。こうして悲劇の観客は、「事物の根底にある生は、諸々の現象のあらゆる変転にもかかわらず、破壊しがたく力強く、喜びに満ちていること」(GT,S.56.)を目の当たりにする。これが悲劇芸術の最も直接的な作用である。

「ディオニュソス的なもの」が悲劇において露わにするのは、秩序づけられ節度を保っているかのように見える個別的生の根底に横たわる、有為転変し絶えざる生成のもとにある「生」の位相である。「生」の根元的力は、同時に我々の個別的生存の限界を暴露する。個々人の「生」は、個別的かつ有限である。しかもプロメテウスの担ったような苦悩へと縛り付けられているがゆえに、理不尽さ、混沌、矛盾を内包する。

ニーチェは古代ギリシア人の抱いていた、仮象による救済への飽くなき欲求――晴朗な造形芸術や壮大な神話体系の創出――の根底に、ある「形而上学的仮定」(die metaphysische Annahme)を導入する。すなわちそれは、「真に存在するものかつ根元的･一者(das Ur-Eine)は、永遠に苦悩するもの、矛盾に満ちたものとして、同時に魅力的な幻影を、喜びに満ちた仮象を、自分の不断の救済のために必要とする」(GT,S.38.)という仮定である。

「生」の根底に関わる厭世的な視点を抱いていたにもかかわらず、この「生」そのものを肯定し、したがってペシミズムを克服していた点に、古代ギリシア人の偉大さがあるとニーチェは見ている。

---

[3] アポロン神は光の神(Lichtgottheit)でもある(Vgl.GT,S.27.)。光が個々の事物を輪郭づけるように、「個体化の原理」は、アポロン神のごとき輝き(Schein)によって事物を分節化する作用をもつ。

（二）　「悲劇の死」

「ディオニュソス的なもの」と「アポロ的なもの」との宥和によって誕生した悲劇は、「ソクラテス的なもの」(das Sokratische)の登場によって死を迎える。「ディオニュソス的なもの」および「アポロ的なもの」が芸術衝動であったならば、「ソクラテス的なもの」とは論理的、学問的衝動である。ソクラテス個人はあくまでも「ソクラテス的なもの」のもたらす論理的、学問的衝動の仮面であり、その背後にあるのは「論理的ソクラテス主義」(das logische Sokratismus)(GT,S.91.)である。

この「論理的ソクラテス主義」のもとでは、芸術はただ単に非理性的な領域に属するものと理解される。ニーチェによれば、ソクラテスは悲劇を、ただ心地よいもののみを描出し有用なものを描出しない、とるに足らない芸術とみなしたという(Vgl.GT,S.92.)。ニーチェにとって、論理的、学問的人間の類型たるソクラテスは、理性のみを頼りとし、論理を徹底させることにより「真なる認識を仮象と虚偽(Irrthum)から選り分ける」(GT,S.100.)ことが可能であるとする楽観主義者として位置づけられる。このようなソクラテス的オプティミズムは、ニーチェが『悲劇の誕生』において提示した、古代ギリシア人のペシミズムとその克服という観点とは対立するものである。

（三）　「悲劇の死」

学問的傾向の過多は、論理を徹底させることによって事物の本質を把握し、真なる認識を仮象や虚偽から選り分けることが可能であるという楽観主義を伴うものであった。しかしながら、我々が生きるところの「生」そのものが苦悩に満ち、矛盾を孕んだものであるならば、そうした楽観主義は挫折せざるを得ないことになる。ニーチェは、学問の精神が限界まで導かれ、この限界において学問のもつ普遍妥当的な真理への要求が否定された後に、「悲劇の再生」が到来することを予期する(Vgl.GT,S.111.)。したがって、「悲劇の再生」は、学問が自己の限界を認識するに至る時点において生じる。ニーチェは、そこから再び芸術に対する本質的な洞察がもたらされると考える。この洞察をニーチェは、「概念において把握されたディオニュソス的英知」(die in Begriffe gafasste dionysische Weisheit)(GT,S.128.)と規定する。

ニーチェは「悲劇の再生」の具体的な表出をヴァーグナーの楽劇に見出していた。そのことは後のニーチェ自身によって否定されてはいるものの、『悲劇の誕生』は、こうした新たな「悲劇的文化」の到来を予感させるヴァーグナーの音楽に対する賛美であり、「悲劇の再生」に対するニーチェの熱望が表現されていたのである。

二　『悲劇の誕生』における歴史性

ニーチェは一八七〇年八月、普仏戦争に志願看護兵として従軍した。同年の九月、ヴァーグナー宛の書簡において、負傷兵らを看護する間に、ニーチェ自身が赤痢とジフテリアに罹患し

た旨を書き記している[4]。この時期既にニーチェは『悲劇の誕生』の着想を得ていた。ただし、『悲劇の誕生』は徹頭徹尾政治には無関心であり、「非ドイツ的」であるという(Vgl.EH,S.310.)。この意味で同書は「反時代的」(unzeitgemäß)(EH,S.309.)著書であった。

前述したように、『人間的、あまりに人間的』第二巻の序文において、ニーチェは『反時代的考察』の最初の三編を、『悲劇の誕生』の成立時期や体験時期のさらに背後に遡っているものとして捉えていた。ニーチェは、『反時代的考察』の第一編「ダーヴィト・シュトラウス、告白者と著述家」(David Strauss der Bekenner und der Schriftsteller)を、彼がまだ学生であった時に抱いていた「ドイツ的教養」や「教養俗物」(Bildungsphilister)に対する嫌悪感に端を発していると述懐する[5]。

またニーチェは第二編「生に対する歴史の利と害について」(Vom Nutzen und Nachtheil der Historie für das Leben)を、「私が＜歴史病＞(die historische Krankheit)に反対して語ったところのもの、それを私は、＜歴史病＞からゆっくりと、骨を折って快癒することを学んだ者として、そして以前＜歴史病＞に罹患していたから、今後は＜歴史＞を放棄するという意志の全くない者として語った」(MA Ⅱ,S.370.)と回想する。

さらに第三編「教育者としてのショーペンハウアー」(Schopenhauer als Erzieher)については、ペシミストであり、最初にして唯一の教育者たるショーペンハウアーに対する崇敬を表現してはいたが、その当時ニーチェは、あらゆる従来のペシミズムに対する批判およびペシミズムの深化のうちにあったと述べられる(ebd.)。

このように、ニーチェは『悲劇の誕生』執筆以前に、既に『反時代的考察』の諸論考の萌芽となる思索を行っていた。以下では、『悲劇の誕生』を、それが古代ギリシア悲劇の歴史的展開の記述であるという観点から、『反時代的考察』の、特に第二編「生に対する歴史の利と害について」を中心に展開されるニーチェの歴史観に基づいて検討したい。

（一）「非歴史的なもの」とギリシア悲劇

ニーチェの歴史に関する認識は、次の命題に集約される。すなわち、「非歴史的なもの(das Unhistorische)と歴史的なもの(das Historische)は、ある個人や民族や文化の健康にとって等しく必要である」(UBHL,S.252.)。動物は過去に対する倦怠も憂慮も知らず、ただ現在の瞬間のみに生きている点で、完全に非歴史的に生存している。したがって動物の生存に特徴的なものは「忘却」(Vergessen)である。認識のうちでは過去と言えるものを持たず、それゆえ過去への悔恨に悩まされることのない動物の生は幸福である。幸福の第一条件は、「忘却-し得ること」(das

---

[4] Nietzsche,Friedrich:*Sämtliche Briefe*,Kritische Studienausgabe,Bd.3,hrsg.v.G.Colli und M. Montinari,Deutscher Taschenbuch Verlag de Gruyter,Berlin/New York,2003,S.142f.

[5] ニーチェ自身による学生時代の記録は、シュレヒタ版ニーチェ全集に収められた「二年間にわたる私のライプツィヒ時代への回顧」(Rückblick auf meine zwei Leipziger Jahre)に詳しい。ライプツィヒ大学で古典文献学教授であるリッチュルの愛弟子となったニーチェの学究生活の記載とともに、当時のニーチェの学問的教養に関する立場が記されている。一例として、当時同じ文献学の学生であったキンケルが、文献学の背後に政治的な目的がなければならないと主張したのに対し、ニーチェは、学問が中立性を保つことの重要性を指摘し、反論している(Vgl. Nietzsche,Friedrich:*Werke in drei Bänden*, Bd.3,hrsg.v.K.Schlechta,1973. S.136.)。

Vergessen-können)、つまり非歴史的に感覚することにある(Vgl.UBHL,S.250.)。

それに対して人間は、過去を「想起」(Erinnerung)する能力をもつ。子供は未だ否定すべきような過去をもたず、現在のうちでこの上なく幸せに戯れているかのように見える。しかし、そうした子供の「忘却」の世界における幸福な戯れも、「そうであった」(es war)という言葉を学ぶことにより、終わりを告げる(Vgl.UBHL,S.249.)。過去の「想起」によって、人間は完全な「忘却」の世界を生きることは出来ない。この過去を「想起」する能力こそ、「歴史的感覚」(der historische Sinn)の源である。ただし、「歴史的感覚」に固執する者は、あたかも眠ることを止めるよう強いられているような人間に似ている。不眠すなわち「歴史的感覚」の過剰は、一人の人間や一民族、一文化を毀損してしまう(Vgl.UBHL,S.250.)。

したがって、「歴史的感覚」の程度を規定し、また、必要に応じて過去のものを「忘却」するための限界を規定しなくてはならない。そのために精確に知っておかなければならないのは、一人の人間、一民族、一文化の「造形力」(die plastische Kraft)がどの程度大きいかということである(Vgl.UBHL,S.251.)。「造形力」とは、自ら独自の仕方で成長し(wachsen)、過去のものと疎遠なものを改造し(umbilden)吸収し(einverleiben)、傷を完治させ(ausheilen)、失ったものを補い(ersetzen)、破壊された形式を自ら型に合わせて作る(nachformen)力を意味する(ebd.)。

上述のような「造形力」を強く保った存在者であればこそ、歴史を自らにとって有用なものとすることができるのである。「造形力」の形成には、適切な時期や度合いで過去を「忘却」する術を持っていること、どのような場合に歴史的に感覚し、あるいは非歴史的に感覚するべきかを察知し得ることが肝要なのである。

ただし、ここで留意すべきは、「非歴史的感覚」は「歴史的感覚」の生起に先立つということである。ニーチェは、「我々はある一定の度合いにおいて、非歴史的に感じ得る能力を、それが何か正しいもの、健康なもの、偉大なもの、何か真に人間的なものがそもそも初めて成長し得る基礎である限り、より重要な、そしてより根源的な能力であると見なさねばならないだろう」(UBHL,S.252.)と述べる。そしてギリシア人こそが、この「非歴史的感覚」を、その民族が最も偉大な力を有していた時代に保持していたという(Vgl.UBHL,S.273.)。その時代とは、どの時期に妥当するのだろうか。ニーチェが念頭に置いているのは、まさに古代ギリシア人が悲劇芸術を創出していた時代である。なぜならば、悲劇芸術を生み出した古代ギリシア人は、その芸術形式において「忘却」の手段を有していたからである。

ギリシア悲劇は「アポロ的なもの」と「ディオニュソス的なもの」との結合によって生じた芸術形態であったが、悲劇の最も本質的な要素は、あくまでも「ディオニュソス的なもの」であった。「ディオニュソス的なもの」のもたらす陶酔状態において、他者との間に横たわる隔たり、人間と自然との間の隔たりが解消され、主観的なものは完全な自己忘却へと導かれる。そして、主観的なものの「忘却」をもたらす「ディオニュソス的なもの」の作用によって、悲劇の観客は、個別的有限的「生」の根底にある、有為転変しつつも永遠の生成を意味する「根元的-一者」と合一する体験を持つに至るのである。

（二）歴史の三形態と『悲劇の誕生』

「非歴史的感覚」は「歴史的感覚」の生起に先立つものであった。しかし過去を「想起」せざるを得ない人間は、歴史を「生」への奉仕のために必要とする。歴史は三つの形態において、生きている者に奉仕する。すなわち、活動し努力する者に属する「記念碑的(monumentalisch)歴史」、保存し敬慕する者に属する「骨董的(antiqualisch)歴史」、苦悩し救済を必要とする者に属する「批判的(kritisch)歴史」の三つである(Vgl.UBHL,S.258.)。以下では、これら三つの歴史の形態と、『悲劇の誕生』でのギリシア悲劇に関する歴史記述との連関を検討してみたい。

まず、「記念碑的歴史」において、『悲劇の誕生』はどのような地位を占めるのだろうか。ニーチェは、ソクラテス以前に登場したギリシア悲劇に、芸術の最高の到達点を見る。「記念碑的歴史」が要求するのは、「個々人の戦いにおける偉大な諸々の瞬間が一つの連なりを形作ること、諸々の瞬間において、数千年を通じた人類の山脈が結びつくこと、そうしたはるか以前に過ぎ去ってしまった瞬間の最高のものが私にとってなお生き生きとして(lebendig)、明らかで(hell)、偉大であること」(UBHL,S.259.)である。この要求は、「偉大なものは永遠であるべきだ」(ebd.)という要求に等しい。偉大であった過去の瞬間を賞賛しつつ、それを現在の自己自身にとって生き生きとしたものとして現前させること、このことによって「記念碑的歴史」は「生」に奉仕する。過去を記念碑的に考察することは、「一度はそこにあった偉大なものは、少なくとも一度は可能だったのであり、それ故おそらくもう一度可能であるだろう」(UBHL,S.260.)との推察へと導かれる。よって、ギリシア悲劇という偉大なる芸術形式を賛美し、さらにその精神が将来において再び到来するであろうという期待は、ニーチェの「悲劇の再生」への熱望と一致する。

つぎに「骨董的歴史」に関してはどうであろうか。「骨董的歴史」とは、自分が由来したもの、そして現在の自分自身と成らしめたものを、忠節(Treue)と愛をもって保存し敬慕する者に属する(Vgl.UBHL,S.265.)。さらに「骨董的歴史」は、自己が現在の自己として生じてきた様々な条件を、自分の後に生じる者のために保存することを目的とする。古典文献学を出自として持つニーチェが、自己自身を陶冶せしめた古代ギリシアの精神を『悲劇の誕生』という書物に纏めあげた事実こそ、「骨董的歴史」の実践そのものである。ただし、ニーチェは、「骨董的歴史」における危険性をも指摘する。「骨董的歴史」は、現在の新鮮な「生」が魂を吹き込み(beseelen)、霊感を吹き込む(begeistern)ことがなければ堕落してしまい、たんに過去の事例を無造作に集めようとする収集熱(Sammelwuth)に駆られるのみとなる(Vgl.UBHL,S.268.)。また「骨董的歴史」に過度に執着するならば、現在の「生」の成長を阻害することになる。なぜならば「骨董的歴史は、まさにただ生を保存することのみを心得ているのであり、創造する(zeugen)ことを心得てはいない」からである(ebd.)。

それでは、現在の「生」をより創造的なものとし、より豊かなものにするためには、「記念碑的歴史」や「骨董的歴史」の他に過去に対してどのような態度が必要なのか。新しい将来の「生」を創造するためには、過去に対する批判的態度もまた必要である。もし過去が現在および将来の「生」を毀損するならば、「人間は生きることが出来るために、過去を破壊し解体する力を持

ち、時折適用しなければならない」(UBHL,S.269.)。こうした力を持つ歴史認識の在り方が「批判的歴史」である。「批判的歴史」においては、過去を法廷に引き出し、断罪することもまた、現在と将来の「生」に奉仕するために必要なこととされる。

悲劇は「ソクラテス的なもの」および「論理的ソクラテス主義」と呼ばれる学問的論理的思考形態の介入によって死を迎えた。ニーチェはこれらを批判し、学問的探求によって我々の生存の全てが明らかにされ得るという近代の楽観主義的な「ソクラテス的文化」(die sokratische Cultur)に対して、悲劇の根幹であるディオニュソス的な精神の再来を希求するのである。

ニーチェは、『反時代的考察』の最初の三編の着想を、『悲劇の誕生』を執筆する以前に得ていた。したがって、「悲劇の誕生」から、その死、再生への歴史的プロセスを記述した『悲劇の誕生』という著作自体が、「生に対する歴史の利と害について」において展開されるニーチェの歴史的観点の実践であると言えよう。

（ちゃぞのよういち　大阪樟蔭女子大学非常勤講師）

［キーワード］
悲劇の誕生　反時代的考察　　歴史性　　自己批判　　歴史の三形態